http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.300　　13/12/13

「なりたい自分」と「実際の自分」

昨日から学習を始めた「枕中記」だが、その第二段落は、自分の人生に満足していない廬生と、そんな風には見えないよという呂翁との会話である。その結果、「じゃあ君が望むような人生を（神仙術で）体験させてあげよう」と呂翁が提案し、その提案にのって別の人生を体験した廬生が、ある結論に至る…という話になっている。

さて、その第二段落の廬生の言葉に、「吾此苟生耳。」というのがあった。さて、訓み方を思い出せるかな？　「われはこれ、かりそめにいくるのみ。」である。次の授業では、当然「苟生耳」とはどういうことなのかを考えることになる。では、ヒントとなるポイントについて質問をするので、それに答えながら予習！してみよう。

1　廬生は何歳だっけ？
2　廬生は今何をしているのだっけ？
3　廬生は自分はどうなると思っていたのだっけ？
4　つまり、廬生にとっての「適」とはどういうことをいうのだろう？

正確な答えは授業でやるとして、30歳になった廬生は、学問に励んで思いのままに出世しようと思っていたにも関わらず、未だに田畑での仕事に精を出すだけの人生を送っており、功績を挙げて将軍や首相になり、ご馳走を並べたり、女性を侍らしたりすることはもちろんのこと、一族を繁栄させることもできそうにないと嘆いているわけだ（…と、かなり答えが入っているなぁ…笑）。

つまり、「なりたい自分」と「実際の自分」を比較して、「実際の自分」は「苟生耳」なのだと結論づけているわけなのだろう。

＊

で、ここで話は説教になるわけだが（笑）、進路を考えるにあたって、25Rの諸君の中にも「なりたい自分」と「実際の自分」との間で彷徨っている人がいるに違いない。そういう人は、素直にこの話の中の廬生に対して、自分ならどんなアドバイスを送るのか、考えてみればよいのである。

アドバイスの方向性としては、常識的には二つが考えられる。一つは、呂翁がいうように、人から見れば廬生には何の不足もないように見えるのだから、余計な望みなど捨てて現在の自分に満足せよという方向である。そしてもう一つは、満足できないなら、「なりたい自分」を目指せという方向であろう。

ちなみに、この話の結末がどうなっているのかというと、呂翁が「道士」であることから想像されるように、道教的な「無為自然」をよしとする結論、つまり「欲」を捨てよという方向で話が展開することになる。

それに対するもう一つの方向は、あえていえば儒教的？なアドバイスということになるのかも知れない。欲望を刺激する？担任という職務についている私としては、当然儒教的なアドバイスにならざるを得ない。君たちは30歳の廬生とは異なるわけだし、しかも（世間が羨む）日比谷に在籍しているのだから。

ちなみに、「なりたい自分」が分からないという人もいよう。しかし、いつか「なりたい自分」に出会えると思ったら大間違い。そういう人は、「なりたい自分」を探すだけの一生を送ってしまいがちだ。先ずは決断を。